高野聖

鏡花作
清方画

高野聖

明治四十一年二月十日印刷
明治四十一年二月廿日發行

著作者　泉鏡花
發行者　東京府下荏原郡品川町利田新地六番地　戸田直秀
發行所　東京市京橋區木挽町四丁目　左久良書房
印刷者　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　守岡功
印刷所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社

一冊金七拾五錢
送費金拾錢

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年12月

高野聖

第一

「參謀本部編纂の地圖を又繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、餘りの道ぢやから、手を觸るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をかゝげて、表紙を附けた折本になつてるのを引張り出した。

飛驒から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い、右も左も山ばかりぢや、手を伸ばすと達きさうな峯があると、其の峯へ峯が乘り巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と頂いた一重の檜笠に凌いで、恁う圖面を見た。」

旅僧は然ういつて、握拳を兩方枕に乘せ、其で額を支へながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋から此の越前敦賀の旅籠屋に來て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてる限り餘り仰向けになつたことのない、詰り傲然として物を見ない質の人物である。

一體東海道掛川の宿から同瀘車に乘り組んだと覺えて居る、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰の如く控へたから別段目にも留まらなかつた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

尾張の停車場で他の乘組員は言合はせたやうに、不殘下りたので、函の中には唯上人と私と二人になつた。

此の滊車は新橋を昨夜九時半に發つて、今夕敦賀に入らうといふ、名古屋では正午だつたから、飯に一折の鮨を買ひた。旅僧も私と同く其の鮨を求めたのであるが、蓋を開けると、ばら〳〵と海苔が懸つた、五目飯の下等なので。

（やあ、人參と干瓢ばかりだ、）と疎匆ッかしく絶叫した、私の顏を見て旅僧は耐へ兼ねたものと見える、吃々と笑ひ出した、固より二人ばかりなり、知己にはそれから成つたのだが、聞けば之から越前へ行つて、派は違ふが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狹へ歸省する私もおなじ處で泊らねばならないのであ

るから、其處で同行の約束が出來た。

渠は高野山に籍を置くものだといつた、年配四十五六、柔和な、何等の奇も見えぬ、可懷い、おとなしやかな風采で、羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟卷を占め、土耳古形の帽を冠り、毛糸の手袋を箱め、白足袋に、日和下駄で、一見僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よりも寧ろ俗歟。

(お泊りは何方ぢやな)といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿の詰らなさを、染々歎息した、第一盆を持つて女中が坐睡をする、番頭が空世辭をいふ、廊下を歩行くとじろ〳〵目をつける、何より最も耐へ難いのは晩飯の支度が濟むと、忽ち灯を行燈に換へて、薄暗い處でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更けるまで寢ることが出來ないから、其間の

心持といつたらない、殊に此頃の夜は長し、東京を出る時から一晩の泊が氣になつてならない位、差支へがなくば御僧と御一所に。

快く頷いて、北陸地方を行脚の節はいつでも杖を休める香取屋といふのがある、舊は一軒の旅店であつたが、一人女の評判なのがなくなつてからは看板を外した、けれども昔から懇意な者は斷らず留て、老人夫婦が内端に世話をして呉れる、宜しくば其へ。其代といひかけて、折を下に置いて、

（御馳走は人參と干瓢ばかりぢや。）

と呵々と笑つた、愼深さうな打見よりは氣の輕い。

第二

岐阜では未だ蒼空が見えたけれども、後は名にし負ふ北國空、米原、長濱は、薄曇、幽に日が射して、寒さが身に染みると思つたが、柳ケ瀬では雨、滊車の窓が暗くなるに從ふて、白いものがちら〳〵交つて來た。

（雪ですよ。）

（然やうぢやな。）といつたばかりで別に氣に留めず、仰いで空を見やうともしない、此時に限らず、賤ケ岳が、といつて古戰場を指した時も、琵琶湖の風景を語つた時も、旅僧は唯頷いたばかりである。

敦賀で悚毛の立つほど煩はしいのは宿引の惡弊で、其日も期したる如く、滊車を下りると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の提を築き、潛拔ける隙もあらなく旅

人を取圍んで、手ン手に喧しく己が家號を呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰つて、へい有難う樣で、を喰はす、頭痛持は血が上るほど耐へ切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻に通扱ける旅僧は、誰も袖を曳かなかつたから、幸其後に跟いて町へ入つて、吻といふ息を吐いた。雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた輕いのがさら〳〵と面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の町はひつそりして一條二條縱横に、辻の角は廣々と、白く積つた中を、道の程八町ばかりで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。床にも座敷にも飾といつては無いが、柱立の見事な、疊の堅い、爐の大なる、自在鍵の鯉は鱗が黃金造であるかと思はる艶を持つた、素ばらしい竈を二ッ並べて一斗飯は焚けさ

うな目覺しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ兩手の先を窘まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、一寸世辭の可い婆さん、件の人參と干瓢の話を旅僧が打出すと、莞爾々々笑ひながら、縮緬雜魚と、鰈の干物と、とろろ昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取做なんど、如何にも、上人とは別懇の間と見えて、連の私の居心の可さと謂つたらない。

驚て二階に寐床を慥へてくれた、天井は低いが、梁は丸太で二抱もあらう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の處では天窓に支へさうになつて居る、巖丈な屋造是なら裏の山から雪頽が來てもびくともせぬ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

特に炬燵が出來て居たから私は其まゝ嬉しく入つた。寐床は最う一組同一炬燵に敷いてあつたが、旅僧は之には來らず、横に枕を並べて、火の氣のない臥床に寐た。

寐る時、上人は帶を解かぬ、勿論衣服も脱がぬ、着たまゝ丸くなつて俯向形に腰からすつぽりと入つて、肩に夜具の袖を掛けると手を突いて畏つた、其の樣子は我々と反對で、顔に枕をするのである。程なく寂然として寢に着きさうだから、滊車の中でもくれ〳〵いつたのは此處のこと、私は夜が更けるまで寐ることが出來ない、あはれと思つて最う暫くつきあつて、而して諸國を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に着かぬの

が癖で、寐るにも此儘ではあるけれども目は未だなか〳〵冴えて居る、急に寐着かれないのはお前樣と同一であらう。出家のいふことでも敎だの、戒だの、說法とばかりは限らぬ、若いの、聞かつしやい、と言て語り出した。後で聞くと宗門名譽の說敎師で、六明寺の宗朝といふ大和尙であつたさうな。

第三

「今に最う一人此處へ來て寢るさうぢやが、お前樣と同國ぢやの、若狹の者で塗物の旅商人。いや此の男なぞは若いが感心に實體な好い男。

私が今話の序開をした其の飛驒の山越を遣つた時の麓

の茶屋で一所になつた富山の賣藥といふ奴あ、けたいの惡い、ねぢ〳〵した厭な壯佼で。

先づこれから峠に掛らうといふ日の、朝早く、尤も先の泊はものゝ三時位には發つて來たので、涼い内に六里ばかり、其の茶屋までのしたのぢやが、朝晴でぢり〳〵暑いわ。

慾張拔いて大急ぎで歩いたから咽が渴いて爲樣がある まい早速茶を飲うと思ふたが、まだ湯が沸いて居らぬといふ。

何うして其時分ぢやからといふて、滅多に人通のない山道、朝顏の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。

床儿の前には冷たさうな小流があつたから手桶の水を汲まうとして一寸氣がついた。

其といふのが、時節柄暑さのため、可恐い惡い病が流行つて、先に通つた辻などといふ村は、から一面に石灰だらけぢやあるまいか。

（もし、姉さん。）といつて茶店の女に、

（此水はこりや井戸のでござりますか。）と、極りも惡し、もじ〳〵聞くとの。

（いんね川のでございす。）といふ、はて面妖なと思つた。

（山したの方には大分流行病がございますが、此水は何から、辻の方から流れて來るのではありませんか。）

（然うでねえ。）と女は何氣なく答へた、先づ嬉しやと思ふと、お聞きなさいよ。

此處に居て先刻から休すんでござつたのが、右の賣藥ぢ

や。此の又萬金丹の下廻と來た日には、御存じの通り、千筋の單衣に小倉の帶、當節は時計を挾んで居ます、脚絆、股引、之は勿論草鞋がけ、千草木綿の風呂敷包の角ばつたのを首に結へて、桐油合羽を小さく疊んで此奴を眞田紐で右の包につけるか、小辨慶の木綿の蝙蝠傘を一本、お極だね。一寸見ると、いやどれもこれも克明で、分別のありさうな顏をして。これが泊に着くと、大形の裕衣に變つて、帶廣解で燒酎をちびり〳〵遣りながら、旅籠屋の女のふとつた膝へ脛を上げやうといふ輩ぢや。

（これや、法界坊、）

なんて、天窓から嘗めて居ら。

（異なことをいふやうだが何かね世の中の女が出來ねえ

と相場が極つて、すつぺら坊主になつて矢張り生命は欲しいのかね、不思議ぢやあねえが、爭はれねもんだ、姉さん見ねえ、彼で未だ未練のある内が可いぢやあねえか、)といつて顏を見合はせて二人で呵々と笑つたい。

年紀は若し、お前樣、私は眞赤になつた、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶豫つて居るとね。

ポンと煙管を拂いて、

(何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなりや、藥を遣らあ、其爲に私がついてるんだぜ、喃姉さん。おい、其だつても無錢ぢやあ不可えよ憚りながら神方萬金丹、一貼三百だ、欲しくば買ひな、未だ坊主に報捨をするやうな罪は造らねえ、其とも何うだお前いふことを肯くか、)といつ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com